

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

1

【解答】

(ア)	(イ)
92	4

【(2)の記述解答と(1)の解説】

(1)  $2024 = 2^3 \cdot 11 \cdot 23$  より,  $2024$  の正の約数を小さいほうから順に 6 つ並べると,

1, 2, 4, 8, 11, 22

よって, 大きいほうから 6 番目の約数は,

$$\frac{2024}{22} = 92 \quad \dots \text{(ア)}$$

【 $2024$  の 6 乗根は複素数の範囲で 6 つあり, 以下では正の実数であるものを考える】

また,  $2024$  の (正の) 6 乗根に最も近い自然数について,

$$3.5^6 = \left(\frac{49}{4}\right)^3 < \left(\frac{25}{2}\right)^3 = \frac{15625}{8} < \frac{16000}{8} = 2000 < 2024, \quad 4^6 = 4096 > 2024$$

より,

$$3.5 < \sqrt[6]{2024} < 4$$

であるから, 求める自然数は,

$$4 \quad \dots \text{(イ)}$$

(2)(i) すべての自然数  $n$  に対して

$$a_1 \leq a_n \leq 2 \quad \dots \text{①}$$

であることを, 数学的帰納法により示す.

(I)  $n = 1$  のとき,  $a_1 \leq 2$  より①が成り立つ.

(II)  $n = k$  ( $k$  は自然数) のとき, ①が成り立つ, すなわち

$$a_1 \leq a_k \leq 2 \quad \dots \text{②}$$

が成り立つと仮定する. 関数  $f(x)$  は,  $x \leq 2$  において

$$\frac{2}{3} - \frac{1}{3}x \leq f(x) \leq 2 - x \quad \dots \text{③}$$

を満たすことから, ③に  $x = a_k (\leq 2)$  を代入して,

$$\frac{2}{3} - \frac{1}{3}a_k \leq f(a_k) \leq 2 - a_k \quad \dots \text{④}$$

これを用いると,

$$a_{k+1} = a_k + f(a_k) \leq a_k + (2 - a_k) = 2 \quad (\because \text{④})$$

$$a_{k+1} - a_1 = a_k + f(a_k) - a_1$$

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$\begin{aligned} &\geq a_k + \left(\frac{2}{3} - \frac{1}{3}a_k\right) - a_1 \quad (\because \textcircled{4}) \\ &= \frac{2}{3}a_k + \frac{2}{3} - a_1 \\ &\geq \frac{2}{3}a_1 + \frac{2}{3} - a_1 \quad (\because \textcircled{2}) \\ &= \frac{1}{3}(2 - a_1) \\ &\geq 0 \quad (\because a_1 \leq 2) \end{aligned}$$

であるから,

$$a_1 \leq a_{k+1} \leq 2$$

である.

したがって,  $n = k + 1$  のときも①は成り立つ.

(I)(II)より,  $a_1 \leq 2$  のとき, すべての自然数  $n$  に対して  $a_1 \leq a_n \leq 2$  となる. (証明終)

(ii)  $a_1 \leq 2$  ならば, すべての自然数  $n$  に対し①が成り立つので,

$$\begin{aligned} 0 &\leq 2 - a_{n+1} \\ &= 2 - \{a_n + f(a_n)\} \\ &\leq 2 - \left\{a_n + \left(\frac{2}{3} - \frac{1}{3}a_n\right)\right\} \\ &= \frac{2}{3}(2 - a_n) \end{aligned}$$

すなわち,

$$0 \leq 2 - a_{n+1} \leq \frac{2}{3}(2 - a_n)$$

が成り立つので, この右側を繰り返し用いると,

$$0 \leq 2 - a_n \leq \left(\frac{2}{3}\right)^{n-1} (2 - a_1)$$

を得る.

ここで,  $\lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{2}{3}\right)^{n-1} (2 - a_1) = 0$  であるから, はさみうちの原理より,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} (2 - a_n) = 0$$

すなわち

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 2$$

(証明終)

となる.

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

2

【解答】

(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)
$\frac{5}{12}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{8}{11}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{1}{2} + \left(\frac{1}{2}\right)^n$

【解説】

(1) 袋の中から、タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲのコインを取り出す事象をそれぞれ $A_1, A_2, A_3$ とすると、それらの事象が起こる確率は、それぞれ $\frac{1}{6}, \frac{2}{6}, \frac{3}{6}$ である。コインを投げてHが出る事象を $B$ とすると、 $B = (A_1 \cap B) \cup (A_2 \cap B) \cup (A_3 \cap B)$ であり、

$$P(A_1 \cap B) = \frac{1}{6} \cdot 1 = \frac{1}{6}$$

$$P(A_2 \cap B) = \frac{2}{6} \cdot 0 = 0$$

$$P(A_3 \cap B) = \frac{3}{6} \cdot \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$$

であるから、求める確率 $P(B)$ は、

$$\begin{aligned} P(B) &= P(A_1 \cap B) + P(A_2 \cap B) + P(A_3 \cap B) \\ &= \frac{1}{6} + 0 + \frac{1}{4} \\ &= \frac{5}{12} \end{aligned}$$

… (ウ)

である。

(2) 求める条件付き確率 $P_B(A_3)$ は、

$$\begin{aligned} P_B(A_3) &= \frac{P(B \cap A_3)}{P(B)} \\ &= \frac{\frac{1}{4}}{\frac{5}{12}} \\ &= \frac{3}{5} \end{aligned}$$

… (エ)

である。

(3) コインを2回投げて、2回ともTが出る事象を $C$ とすると、 $C = (A_1 \cap C) \cup (A_2 \cap C) \cup (A_3 \cap C)$ であり、

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$P(A_1 \cap C) = \frac{1}{6} \cdot 0^2 = 0$$

$$P(A_2 \cap C) = \frac{2}{6} \cdot 1^2 = \frac{1}{3}$$

$$P(A_3 \cap C) = \frac{3}{6} \cdot \left(\frac{1}{2}\right)^2 = \frac{1}{8}$$

であるから、

$$\begin{aligned} P(C) &= P(A_1 \cap C) + P(A_2 \cap C) + P(A_3 \cap C) \\ &= 0 + \frac{1}{3} + \frac{1}{8} \\ &= \frac{11}{24} \end{aligned}$$

よって、求める条件付き確率  $P_C(A_2)$  は、

$$\begin{aligned} P_C(A_2) &= \frac{P(C \cap A_2)}{P(C)} \\ &= \frac{\frac{1}{3}}{\frac{11}{24}} \\ &= \frac{1}{3} \cdot \frac{24}{11} \\ &= \frac{8}{11} \end{aligned} \quad \dots \text{(オ)}$$

である

(4) 「コインのタイプが分かる」とは、H, T が両方とも出るということである。

よって、求める確率は、タイプⅢのコインを取り出し、かつ 2 回投げて H, T が 1 回ずつ出る確率であるから、

$$\frac{3}{6} \cdot \left( {}_2C_1 \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} \right) = \frac{1}{4} \quad \dots \text{(カ)}$$

である。

(5) 求める確率は、「タイプⅢのコインを取り出し、かつ  $n$  回投げて H, T が少なくとも 1 回ずつ出る事象」の余事象の確率であるから、

$$1 - \frac{3}{6} \cdot \left\{ 1 - \left(\frac{1}{2}\right)^n \cdot 2 \right\} = \frac{1}{2} + \left(\frac{1}{2}\right)^n \quad \dots \text{(キ)}$$

である。

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

3

【解答】

(ク)	(ケ)	(コ)	(サ)	(シ)
$I - 4a$	$\frac{f(t)}{t}$	$-t + \frac{5}{t}$	$-2$	$\frac{f(\sqrt{5})}{\sqrt{5}}$

【(2)(4)の記述解答とその他の問題の解説】

(1)  $a \leq \frac{f(3)}{3}$  のとき,  $1 \leq x \leq 3$  において,

$$f(x) - ax \geq f(3) - \frac{f(3)}{3} \cdot 3 = 0$$

であるから,

$$\begin{aligned} S &= \int_1^3 |f(x) - ax| dx \\ &= \int_1^3 \{f(x) - ax\} dx \\ &= \int_1^3 f(x) dx - a \int_1^3 x dx \\ &= I - 4a \end{aligned}$$

… (ク)

である.

$a \geq f(1) (> 0)$  のとき,  $1 \leq x \leq 3$  において,

$$f(x) - ax \leq f(1) - f(1) \cdot 1 = 0$$

であるから,

$$\begin{aligned} S &= \int_1^3 |f(x) - ax| dx \\ &= \int_1^3 -\{f(x) - ax\} dx \\ &= -(I - 4a) \end{aligned}$$

である.

(2)  $g(x) = f(x) - ax$  とおくと,  $\frac{f(3)}{3} < a < f(1)$  により,

$$\begin{aligned} g(1) &= f(1) - a \\ &> f(1) - f(1) = 0 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} g(3) &= f(3) - 3a \\ &< f(3) - 3 \cdot \frac{f(3)}{3} = 0 \end{aligned}$$

であり,  $f(x)$  は連続関数より  $g(x)$  も連続関数であるから, 方程式  $g(x) = 0$  は 1 と 3 の間に少なくとも 1 つ解をもつ.

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

次に、 $\frac{f(3)}{3} < a < f(1)$  より  $a$  であるから、 $ax$  は単調に増加し、さらに  $1 \leq x \leq 3$  で  $f(x)$  が単調に減少することより、 $g(x)$  は  $1 \leq x \leq 3$  で単調に減少する。

よって、 $1 < x < 3$  で方程式  $g(x) = 0$ 、すなわち方程式  $f(x) - ax = 0$  は解をただ 1 つもつ。

(証明終)

(3)  $\frac{f(3)}{3} < a < f(1)$  のもとで、 $x = t$  は方程式  $f(x) - ax = 0$  の解であるから、

$$f(t) - at = 0 \quad \therefore \quad a = \frac{f(t)}{t} \quad (\because 1 < t < 3 \text{ より } t \neq 0) \quad \dots \text{(ケ)}$$

次に、(2)より

$$1 \leq x \leq t \text{ のとき, } |f(x) - ax| = f(x) - ax$$

$$t \leq x \leq 3 \text{ のとき, } |f(x) - ax| = -\{f(x) - ax\}$$

であるから、

$$\begin{aligned} S &= \int_1^3 |f(x) - ax| dx \\ &= \int_1^t \{f(x) - ax\} dx + \int_t^3 -\{f(x) - ax\} dx \\ &= \int_1^t f(x) dx - \int_t^3 f(x) dx - a \int_1^t x dx + a \int_t^3 x dx \\ &= F(t) - \{F(3) - F(t)\} - a \cdot \frac{1}{2}(t^2 - 1) + a \cdot \frac{1}{2}(9 - t^2) \\ &= 2F(t) - F(3) - a(t^2 - 5) \\ &= 2F(t) - F(3) - (t^2 - 5) \cdot \frac{f(t)}{t} \\ &= 2F(t) - F(3) + \frac{5 - t^2}{t} \cdot f(t) \end{aligned}$$

のように  $S$  は関数  $F(x)$  と分数式

$$q(t) = \frac{5 - t^2}{t} \quad \dots \text{(コ)}$$

を用いて表される。

(4)

$$F(x) - F(t_0) - (x - t_0)f(x) = \int_{t_0}^x \{f(s) - f(x)\} ds \quad \dots \text{①}$$

であり、 $1 \leq x \leq 3$ 、 $1 < t_0 < 3$  に注意すると、

(i)  $x = t_0$  のとき、①の値は 0 である。

(ii)  $t_0 < x$  のとき、

$f(s)$  は  $t_0 \leq s \leq x$  で単調に減少するから、この区間で  $f(s) - f(x) \geq 0$  である。よって、

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$\int_{t_0}^x \{f(s) - f(x)\} ds > 0 \quad (\because t_0 < x)$$

である。

(iii)  $x < t_0$  のとき、

$f(s)$  は  $x \leq s \leq t_0$  で単調に減少するから、この区間で  $f(s) - f(x) \leq 0$  である。よって、

$$\int_{t_0}^x \{f(s) - f(x)\} ds > 0 \quad (\because t_0 > x)$$

である。

(i)~(iii) より、 $1 \leq x \leq 3$  を満たすすべての実数  $x$  に対し、

$$\int_{t_0}^x \{f(s) - f(x)\} ds \geq 0$$

が成り立つ（等号は、 $x = t_0$  のときに限り成立する）。よって、①より、

$$F(x) - F(t_0) - (x - t_0)f(x) \geq 0$$

すなわち、

$$F(x) - F(t_0) \geq (x - t_0)f(x)$$

が成り立つ（これも等号は、 $x = t_0$  のときに限り成立する）。

(証明終)

(5)

$$\begin{aligned} h(x) &= 2(x - t_0)f(x) + p(x)f(x) \\ &= \{2(x - t_0) + p(x)\}f(x) \end{aligned}$$

とおく。  $r(x) = 2(x - t_0) + p(x)$  とおくと、 $f(x) > 0$  であるから、 $1 \leq x \leq 3$  を満たすすべての実数  $x$  に対し、 $h(x) \geq 0$  が成り立つことは、

$$1 \leq x \leq 3 \text{ を満たすすべての実数 } x \text{ に対し、 } r(x) \geq 0 \text{ が成り立つ} \quad \dots (*)$$

ことに他ならない。ここで、

$$r(t_0) = p(t_0) = 0$$

であり、

$$r'(x) = 2 + p'(x)$$

$$r''(x) = p''(x) > 0$$

より、 $r'(x)$  は単調に増加するから、

$$r'(t_0) = 0$$

ならば、 $(*)$  が成り立つ。すなわち、

$$2 + p'(t_0) = 0$$

つまり、

$$p'(t_0) = -2$$

$\dots (サ)$

ならば、 $(*)$  が成り立つ。

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

(6) (1)より,  $a \leq \frac{f(3)}{3}$  のとき,  $S$  は  $a$  の単調減少関数,  $a \geq f(1)$  のとき,  $S$  は  $a$  の単調増加

関数であるから,  $S$  の最小は  $\frac{f(3)}{3} \leq a \leq f(1)$  において起こる.

$\frac{f(3)}{3} \leq a \leq f(1)$  のとき,  $a = \frac{f(t)}{t}$  は  $t$  について単調に減少するから,  $t$  は  $1 \leq t \leq 3$  の範囲を変化する. また, (3)で求めた  $q(t) = \frac{5-t^2}{t} = -t + \frac{5}{t}$  について,

$$q'(t) = -1 - \frac{5}{t^2}$$

$$q''(t) = \frac{10}{t^3} > 0 \quad (\because 1 \leq t \leq 3)$$

で,  $t = \sqrt{5}$  のとき

$$q(\sqrt{5}) = -\sqrt{5} + \sqrt{5} = 0, \quad q'(\sqrt{5}) = -1 - 1 = -2$$

である. よって, (5)の不等式で,  $p(x)$  を  $q(x)$ ,  $t_0 = \sqrt{5}$  とおくことにより,

$$2(x - \sqrt{5})f(x) + q(x)f(x) \geq 0 \quad \dots \textcircled{2}$$

が成り立つ (等号成立は  $x = \sqrt{5}$  のときに限られる). さらに(4)で示したことより,

$$F(x) - F(\sqrt{5}) \geq (x - \sqrt{5})f(x) \quad \dots \textcircled{3}$$

が成り立つ (等号成立は  $x = \sqrt{5}$  のときに限られる). ②, ③を用いると,  $1 \leq t \leq 3$  において,

$$\begin{aligned} S &= 2\{F(t) - F(\sqrt{5})\} + 2F(\sqrt{5}) - F(3) + q(t) \cdot f(t) \\ &\geq 2(t - \sqrt{5})f(t) + 2F(\sqrt{5}) - F(3) + q(t) \cdot f(t) \\ &\geq 2F(\sqrt{5}) - F(3) \end{aligned}$$

であり, 2つの不等号の等号はいずれも,  $t = \sqrt{5}$  のときに限り成立するから,  $S$  が最小となる

$t$  の値は  $t = \sqrt{5}$  である.

したがって,

$$a = \frac{f(\sqrt{5})}{\sqrt{5}} \quad \dots \text{(答)}$$

のとき  $S$  は最小となる.



# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

4

【解答】

(ス)	(セ)	(ソ)	(タ)	(チ)	(ツ)	(テ)
$\frac{\sqrt{3}}{2}$	$-\frac{4}{3}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{\sqrt{2}}{3}$	-1	$\frac{1}{2}\sqrt{2t^2 - 2t + 1}$	$\frac{1}{3}$

【解説】

(1) 三角形OABの面積は,

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}\sqrt{|\vec{a}|^2|\vec{b}|^2 - (\vec{a}\cdot\vec{b})^2} &= \frac{1}{2}\sqrt{1^2\cdot 2^2 - 1^2} \\ &= \frac{\sqrt{3}}{2} \end{aligned} \quad \dots (ス)$$

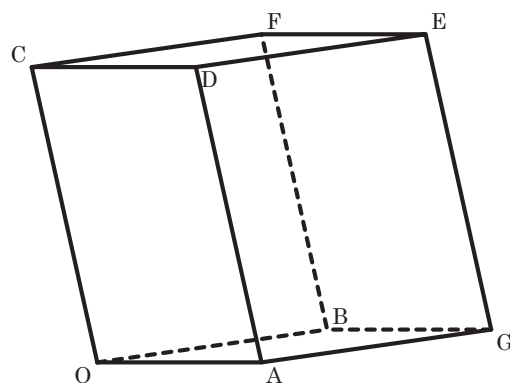
実数  $x, y$  を用いて,  $\vec{CH} = x\vec{a} + y\vec{b} - \vec{c}$  とおく. このとき  $\vec{OH} = x\vec{a} + y\vec{b}$  である.

$$\vec{CH} \perp \text{平面OAB} \Leftrightarrow \vec{CH} \cdot \vec{OA} = 0 \quad \text{かつ} \quad \vec{CH} \cdot \vec{OB} = 0$$

であり,

$$\begin{aligned} \vec{CH} \cdot \vec{OA} &= (x\vec{a} + y\vec{b} - \vec{c}) \cdot \vec{a} \\ &= x|\vec{a}|^2 + y\vec{a} \cdot \vec{b} - \vec{a} \cdot \vec{c} \\ &= x \cdot 1^2 + y \cdot 1 - (-1) \\ &= x + y + 1 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \vec{CH} \cdot \vec{OB} &= (x\vec{a} + y\vec{b} - \vec{c}) \cdot \vec{b} \\ &= x\vec{a} \cdot \vec{b} + y|\vec{b}|^2 - \vec{b} \cdot \vec{c} \\ &= x \cdot 1 + y \cdot 2^2 - 0 \\ &= x + 4y \end{aligned}$$



がともに 0 に等しいので

$$\begin{cases} x + y + 1 = 0 \\ x + 4y = 0 \end{cases}$$

これを解いて,

$$x = -\frac{4}{3}, \quad y = \frac{1}{3} \quad \dots (セ) (ソ)$$

$\vec{OH} = -\frac{4}{3}\vec{a} + \frac{1}{3}\vec{b}$  であるから,

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$\begin{aligned}
 |\overline{OH}|^2 &= \left| -\frac{4}{3}\vec{a} + \frac{1}{3}\vec{b} \right|^2 \\
 &= \frac{16}{9}|\vec{a}|^2 - \frac{8}{9}\vec{a} \cdot \vec{b} + \frac{1}{9}|\vec{b}|^2 \\
 &= \frac{16}{9} \cdot 1^2 - \frac{8}{9} \cdot 1 + \frac{1}{9} \cdot 2^2 \\
 &= \frac{4}{3}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \therefore CH &= \sqrt{OC^2 - OH^2} \\
 &= \sqrt{2^2 - \frac{4}{3}} \\
 &= \frac{2\sqrt{6}}{3}
 \end{aligned}$$

したがって、四面体OABCの体積は、

$$\frac{1}{3} \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} \cdot \frac{2\sqrt{6}}{3} = \frac{\sqrt{2}}{3} \quad \dots (\text{タ})$$

(2)  $\overline{OI} = t\vec{a}$ ,  $\overline{OJ} = \frac{1}{2}\vec{b}$ ,  $\overline{OK} = \vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c}$  より,

$$\begin{aligned}
 \overline{JI} \cdot \overline{JK} &= (\overline{OI} - \overline{OJ}) \cdot (\overline{OK} - \overline{OJ}) \\
 &= \left( t\vec{a} - \frac{1}{2}\vec{b} \right) \cdot \left( \frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c} \right) \\
 &= \frac{1}{2}t\vec{a} \cdot \vec{b} + \frac{1}{2}t\vec{a} \cdot \vec{c} - \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 - \frac{1}{4}\vec{b} \cdot \vec{c} \\
 &= \frac{1}{2}t \cdot 1 + \frac{1}{2}t \cdot (-1) - \frac{1}{4} \cdot 2^2 - \frac{1}{4} \cdot 0 \\
 &= -1
 \end{aligned}$$

... (チ)

$$\begin{aligned}
 |\overline{JI}|^2 &= \left| t\vec{a} - \frac{1}{2}\vec{b} \right|^2 \\
 &= t^2|\vec{a}|^2 - t\vec{a} \cdot \vec{b} + \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 \\
 &= t^2 \cdot 1^2 - t \cdot 1 + \frac{1}{4} \cdot 2^2 \\
 &= t^2 - t + 1
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 |\overline{JK}|^2 &= \left| \frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c} \right|^2 \\
 &= \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{2}\vec{b} \cdot \vec{c} + \frac{1}{4}|\vec{c}|^2 \\
 &= \frac{1}{4} \cdot 2^2 + \frac{1}{2} \cdot 0 + \frac{1}{4} \cdot 2^2 \\
 &= 2
 \end{aligned}$$

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

よって、三角形 IJK の面積は、

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}\sqrt{|\vec{JI}|^2|\vec{JK}|^2 - (\vec{JI} \cdot \vec{JK})^2} &= \frac{1}{2}\sqrt{(t^2 - t + 1) \cdot 2 - (-1)^2} \\ &= \frac{1}{2}\sqrt{2t^2 - 2t + 1} \end{aligned} \quad \dots (\text{ツ})$$

(3) 直線 DE と平面 IJK の交点を L とすると、実数  $p, q, r$  を用いて、

$$\begin{aligned} \vec{OL} &= p\vec{OI} + q\vec{OJ} + r\vec{OK} \\ &= p \cdot t\vec{a} + q \cdot \frac{1}{2}\vec{b} + r \cdot \left(\vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c}\right) \\ &= pt\vec{a} + \left(\frac{1}{2}q + r\right)\vec{b} + \frac{1}{2}r\vec{c} \end{aligned} \quad \dots \textcircled{1}$$

$$p + q + r = 1 \quad \dots \textcircled{2}$$

が成り立つ。L が辺 DE 上にあるのは、 $\textcircled{1}$  より、

$$pt = 1 \quad \text{すなわち} \quad p = \frac{1}{t} \quad (\because 0 < t < 1) \quad \dots \textcircled{3}$$

$$\frac{1}{2}r = 1 \quad \text{すなわち} \quad r = 2 \quad \dots \textcircled{4}$$

$$0 \leq \frac{1}{2}q + r \leq 1 \quad \dots \textcircled{5}$$

が全て成り立つときである。 $\textcircled{2}$ 、 $\textcircled{3}$ 、 $\textcircled{4}$  より、

$$\begin{aligned} \frac{1}{t} + q + 2 &= 1 \\ \therefore q &= -1 - \frac{1}{t} \end{aligned} \quad \dots \textcircled{6}$$

$\textcircled{4}$ 、 $\textcircled{6}$  を  $\textcircled{5}$  に代入して、

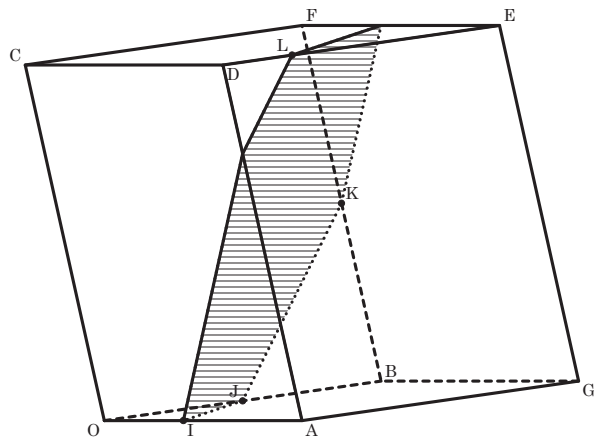
$$0 \leq \frac{1}{2}\left(-1 - \frac{1}{t}\right) + 2 \leq 1$$

$$\therefore 1 \leq \frac{1}{t} \leq 3$$

$$\therefore \frac{1}{3} \leq t \leq 1$$

これと  $0 < t < 1$  より、

$$\frac{1}{3} \leq t < 1 \quad \dots (\text{テ})$$



# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

5

【解答】

(ト)	(ナ)	(ニ)	(ヌ)	(ネ)
$2\pi r$	$(1-r)(\cos t + i \sin t)$	$r \left( \cos \frac{r-1}{r} t + i \sin \frac{r-1}{r} t \right)$	$8r(1-r)$	$\frac{4(1-r)}{\pi}$

【解説】

(1) 時刻  $t$  において、複素数 1 に対応する点を A, 複素数  $w(t)$  に対応する点を  $O_t$ , 複素数  $z(t)$  に対応する点を  $P_t$ , 複素数  $\cos t + i \sin t$  に対応する点を  $Q_t$  とする. このとき,

$$(\text{弧 } AQ_t \text{ の長さ}) = (\text{弧 } P_t Q_t \text{ の長さ}) \quad \dots \textcircled{1}$$

であるから,  $\overline{O_t Q_t}$  から  $\overline{O_t P_t}$  まで時計回りに測った角を  $\theta$  とすると,

$$1 \cdot t = r\theta \quad \therefore \theta = \frac{t}{r} \quad \dots \textcircled{2}$$

$n$  を自然数とする.  $t > 0$  において,  $n$  回目に  $P_t$  が  $C_1$  上に位置する, すなわち  $\theta = 2\pi n$  となるのは, ②より

$$t = 2\pi nr$$

のときである. よって, その中で最小のものは,  $n = 1$  として,

$$t = 2\pi r \quad \dots \text{(ト)}$$

である.

(2)  $\overline{OO_t} = (1-r)\overline{OQ_t}$  であるから,

$$w(t) = (1-r)(\cos t + i \sin t) \quad \dots \text{(ナ)}$$

また,  $\overline{O_t P_t}$  は,  $\overline{O_t Q_t}$  を角  $-\theta$  だけ回転させたものであるから,

$$\overline{OQ_t} = \overline{OO_t} + \overline{O_t Q_t} = \overline{OO_t} + r\overline{O_t Q_t}$$

$$\therefore z(t) = w(t) + r \left\{ \cos \left( t - \frac{t}{r} \right) + i \sin \left( t - \frac{t}{r} \right) \right\}$$

$$= w(t) + r \left( \cos \frac{r-1}{r} t + i \sin \frac{r-1}{r} t \right) \quad \dots \text{(ニ)}$$

である.

(3) (2)より,

$$\begin{aligned} z(t) &= (1-r)(\cos t + i \sin t) + r \left( \cos \frac{r-1}{r} t + i \sin \frac{r-1}{r} t \right) \\ &= (1-r)\cos t + r \cos \frac{r-1}{r} t + i \left\{ (1-r)\sin t + r \sin \frac{r-1}{r} t \right\} \end{aligned}$$

であるから,  $z(t) = x(t) + iy(t)$  とおくと,

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$x(t) = (1-r)\cos t + r \cos \frac{r-1}{r}t$$

$$y(t) = (1-r)\sin t + r \sin \frac{r-1}{r}t$$

とおくと、時刻 0 から時刻  $2\pi r$  の間に P が動く道のりは、

$$\begin{aligned} & \int_0^{2\pi r} \sqrt{\{x'(t)\}^2 + \{y'(t)\}^2} dt \\ &= \int_0^{2\pi r} \sqrt{\left\{- (1-r)\sin t - (r-1)\sin \frac{r-1}{r}t\right\}^2 + \left\{(1-r)\cos t + (r-1)\cos \frac{r-1}{r}t\right\}^2} dt \\ &= (1-r) \int_0^{2\pi r} \sqrt{\left\{\sin t - \sin \frac{r-1}{r}t\right\}^2 + \left\{\cos t - \cos \frac{r-1}{r}t\right\}^2} dt \quad (\because 0 < t < 1) \\ &= (1-r) \int_0^{2\pi r} \sqrt{2 - 2\left(\cos t \cos \frac{r-1}{r}t + \sin t \sin \frac{r-1}{r}t\right)} dt \\ &= (1-r) \int_0^{2\pi r} \sqrt{2 - 2\cos \frac{t}{r}} dt \\ &= 2(1-r) \int_0^{2\pi r} \left| \sin \frac{t}{2r} \right| dt \\ &= 2(1-r) \int_0^{2\pi r} \sin \frac{t}{2r} dt \\ &= -4r(1-r) \left[ \cos \frac{t}{2r} \right]_0^{2\pi r} \\ &= 8r(1-r) \end{aligned} \quad \dots \text{ (又)}$$

である。

(4)  $t > 0$  に対し、

$$2\pi nr \leq t < 2\pi(n+1)r \quad \dots \text{③}$$

をみたく自然数  $n$  がただ一つ存在し、これを用いると

$$8n \cdot r(1-r) \leq l(t) < 8(n+1) \cdot r(1-r) \quad \dots \text{④}$$

である。よって、③、④より、

$$\begin{aligned} & \frac{8n \cdot r(1-r)}{2\pi(n+1)r} < \frac{l(t)}{t} < \frac{8(n+1) \cdot r(1-r)}{2\pi nr} \\ \therefore & \frac{4(1-r)}{\pi} \cdot \frac{n}{n+1} < \frac{l(t)}{t} < \frac{4(1-r)}{\pi} \cdot \frac{n+1}{n} \end{aligned} \quad \dots \text{⑤}$$

一方、③より、

$$n > \frac{t}{2\pi} - 1$$

であるから、 $t \rightarrow \infty$  のとき  $n \rightarrow \infty$  であり、

# 2024年度 慶應義塾大学 理工学部 数学

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{4(1-r)}{\pi} \cdot \frac{n}{n+1} = \frac{4(1-r)}{\pi}$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{4(1-r)}{\pi} \cdot \frac{n+1}{n} = \frac{4(1-r)}{\pi}$$

したがって、⑤とはさみうちの原理より、

$$\lim_{l \rightarrow \infty} \frac{l(t)}{t} = \frac{4(1-r)}{\pi}$$

… (ネ)

である。